

「川辺川の流水型ダムに関する環境評価準備レポート」に係る

公聴会資料：令和6年3月5日10時20分集合：於カルチャーパレス小ホール

又6.3.5 於カルチャーパレス  
小ホール

公聴会でお話する という初めて  
の経験に とても緊張致しておりま  
す。

先ずは新年早々、最大震度7とい  
う、石川県能登地方（珠洲市）の被災  
地の皆様に、心よりの祈りを 捧げ  
たいと思います。

さて、今回学識も何もない浅学の  
私にお話できるとは、縁あつて

ふるさと

山紫水明の恵み豊かなこの故郷で、  
自然と向き合って暮らしてきた  
長い生涯の中で 学ばせて頂いたこ

とを話すしかないような気が致します。

然し、その中に 大切な私達人類への警鐘と、これから向かうべき方向へのキーワードが 示唆されている気がしてなりません。

私の両親は 太平洋戦争の終戦を、

ふるさと

東京のど真ん中で迎え、故郷を離れようとしなない祖母と暮らす為、球磨川のほとりで暮らすことを選択しました。

敗戦の余燼を抱えた当時、両親始め、

周囲の人々の生きるに必死な婆は、昭和二十二年の春に生を受けた私の脳裏にも、昭和四十年の洪水で流失し、二度と復元できないう懐かしい水車の回る光景と共に、今も思い起こすことが出来ます。

戦後十年間程の、生きさんが為の必死な親達の闘いの姿は、私達子供にも黙々と働くこと、辛抱すること、小さな恵みにも感謝することを、無言の後ろ姿で諭された気が致します。

私の住んでいる地帯は、北に球磨川、



南に**亀が淵池** と呼ばれていた低い地形  
の中にありましたので、昔から**水害の常  
襲地帯**でもありました。

住まいも床を高く、避難時に物を一  
時片づける、中二階まで用意してあり、  
水位も 球磨川を見に行かなくても、  
**亀が淵池の水位**を見れば、「避難時」が  
推し量れる生活の知恵も備わっていまし  
た。

普段見ることのない、きびきびとした親  
の緊張した姿に、子供ながら非常時を  
感じ、想像できな**いバカ力**を發揮して、  
荷物を運び上げていたことを 懐かしく  
思い出します。

それからでも 充分高台へ逃げる時間の  
余裕もあつたのです。

しかし、忘れもしません。昭和四十年

七月三日、東京にある 大学に通つてい  
た私は、音大の付属高校に通つていた妹

ふるさと

と 故郷の水害状況を見ようと テレビ  
のスイッチを入れた途端に 飛び込んだ  
画面は、まるで海原のような 川面に浮  
かぶ二棟の屋根の上に 這いつくばるよう  
にして流されている、お隣の「ちよばあち  
やん」と呼んでいた人と その息子さん、  
そして他の一棟の屋根にも 子供の頃か  
ら可愛がつて頂いていた 御家族の姿が



元え、とても 衝撃を受けました。

この時の詳しいご家族の手記は、ご縁が  
あり、今も 私の手元に残っておりま  
すが、「ちよさん」は、屋根が激しい水の  
圧力に傾き、助けようとした息子さん  
の手を離れ、流れの渦に巻かれ、命を落  
とされてしまいました。

この時、両親始め皆さんが 口々に話さ  
れていたのは、「いつものように 逃げよう  
としてからの水位の上昇が あまりにも  
急激で、もう屋根に逃げろしかなかった」  
ということでした。

として、「市房ダムができる前は こんな  
事はなかった」という話が、あちこちで聞

かれました。

私の四十年時の水害についての記憶は、今でも脳裏に浮かぶ此の映像と、両親や近所の方々の体験談ですが、

これまでと違う 水位の急激な上昇を体感したのは、令和二年 七月四日の豪雨水害の時でした。

昭和四十年時の水位に合わせて リノベーションした自宅一階は 駐車場と倉庫、二階を住まいにしていたので、倉庫に入れていた米袋を トラックに積んで運ぼうと、その作業の数十分の間に、折角積んだ米も トラックごと水中に埋まり、泳いで逃げ出す始末、



それでも心のどこかに 昭和四十年の水  
位以上になる筈がないなどと、安易な妄  
信に委ねていたことも 事実でした。

その矢先、「山の南側斜面が崩れ、宿  
泊棟に土砂が流れ込んでい

る」という連  
絡を受け、小川のように流れ込む 水と  
土砂との格闘が始まりました。

その時よぎったのは、数年前から周辺の  
山の杉、檜が次々と伐採され、山肌が露

わになった現状を見た時の予感でした。

あら

「もしかしたら」が 如実に現実として、  
提示されたことに 驚きを隠せませんでした。  
した。

子ども心に聞いていた「山の木はナ 丸裸

にしちやいかん」というお爺さん達の言葉が、蘇ってくるのです。

私事になりますが、主人の実家の墓参に行く度に、「子供の頃は家の近くの球磨川で面白いほど魚が釣れ、潜るのが楽しみだった」と話してくるのですが、

その光を見ると、葦などの草や木に覆われた景色の中に、一筋の細い澱んだ筋状の細い川が流れています。

「これも 球磨川？」

こういう死んだ景色を見ると、地域貢献の為と信じ（させられて）、先祖より受け継いだ 造り酒屋の看板を降ろさ

ざるを得なかったことへの疑問も、頭を擡



げます。

そして、「本当にダムは 私達の命を守る  
砦に成り得るのか？」と 思ってしまったうの  
です。

自然の営みは、人間に都合のいい、机  
上の空論を翳しても、それを嘲笑うよ  
うに、牙を剥いてくるのが、自然と対峙  
して暮らしていると よく解ります。

**想定以上の災害が起きるのが 当たり前前**  
のようになつた今日、川辺川ダムありき  
で考慮すると 市房ダム双方の同時放  
流をやらざるを得ない事態が起きない  
とは、誰も言えないのではないかという不  
安、そして、その先には 又、想定外の



放流量、暗雲が拡がるばかりです。

まさに「禍福は人にあり」で、この世の

わざわい

しあわせ

禍も福も 全ては人に起因するもの  
だと思っています。

「忍耐と哲学をかければ ものごとは動い  
ていく」と言われ、現場主義を貫かれた  
私の尊敬する緒方貞子先生のような真  
の勇氣と人類への愛をもって、本当に大  
切なものを見失わないようにと 願うば  
かりです。

そして 五十年、百年先を見据えて、  
悲鳴をあげている地球の一部でもある

ふるさと

我が故郷の自然の声に 真摯に耳を傾け、

対話をし、事実を見据えて検証し、知  
恵を絞り、後悔のない球磨・人吉の未来  
を構築して頂きますよう、心より願  
い申しあげます。

人吉市在住

川越郁子